

[要旨]

アメリカ合衆国における「近代的セクシュアリティ」の 形成をめぐる歴史研究動向 ——「行為」から「アイデンティティ」へ?——

箕輪 理美

アメリカでは過去30年にかけて、セクシュアリティの歴史についての研究の数は増大し、質の高い研究を多く生み出してきた。こうした歴史家の多くは、理論面においてミシェル・フーコーの著作に多大な影響を受けているが、フーコーの主張の中でも特に影響力をもってきたのは、19世紀を通して西洋社会において同性愛的な行為や欲望に付与される意味が禁じられた「行為」から個人の「アイデンティティ」の発現へと転換したという議論である。アメリカ史研究者は、この性的アイデンティティという概念が「近代的セクシュアリティ」を構成する重要な指標であるとなし、アメリカでは具体的にはいつごろ、どのような状況下で同性間の性行為がホモセクシュアリティとして認識されるようになったのかという問題に大きな関心を向けてきた。しかし、ごく最近の研究の中には、そのような決定的な性認識の転換がそもそも実際に起こったのかという点に疑問を呈するものが現れている。

本稿は、アメリカ合衆国における近代的セクシュアリティを扱った歴史研究の動向を概観することを目的としている。まず注目すべきなのは、同性間の性行為や欲望をアイデンティティの表出と見なす態度は近代的性システムを特徴づけるものではあるが、その際の「ホモセクシュアリティ」の定義がジェンダー逸脱から同性への性的志向に移行したことがさらに決定的な変化であるというコンセンサスが形成されてきた点である。しかし、2000年代以降に現れた研究が論証したように、こうした前近代から近代へのいわゆる「転換」は現実には不完全なものである。本稿はこのような動向を踏まえ、「近代的セクシュアリティ」についての今後の歴史研究の方向性に関して一考察を加える。